

講 座

フロイトは何を遺したか

—フロイトの復権（8・最終回）—

布施 裕二

【キーワード】 本能, 人間の特徴, 生活過程, 夢を描く

連載を終えるに当たり、これまでに何が分かったかを見ておく。まずは精神を「基本装置」から捉える見方が、フロイト学説の原点になっていることである。それを「仮説」として、全ての精神現象を、そこから説いていく。それは脳細胞の働き、中でも像を創る働きを理解出来なかったことによる。それゆえ、脳細胞とは別のところに「精神装置」を設定することになった。このことが学説の足枷となり、その結果として「機械論」に陥った。

次に、精神装置の根本を、「本能」としたのが特徴である。初めは性的本能から全てを説いていたのが、後には破壊本能を設定することになった。全ての精神的なあり方を、本能から説くのである。この「本能論」もまた、後に説くように、フロイト学説を限界づける。

何故にそのようになったかは、一つはその時代の限界であり、脳や認識に関する科学的究明が幼かったことによる。もう一つは、フロイト自身の経験主義的な態度ゆえである。すなわち、フロイト学説の構成を、診療経験や自身の幼児期体験に負うことが大だったことである。そこで目にした患者の性的欲望とその防御、そしてその防御の解放によって、患者の症状が軽減あるいは消失したことが、性的本能論の基本になった。また、自分自身の両親との幼児期における関係（その思い出）が、エディプス・コンプレックスという概念の提起につながったのである。

まずは「機械論」の問題から見てみる。機械論というのは、人間の身体や精神の働きを、自動的な機械のように見るものである。そこで最も軽視されるのは、人間の意志という精神活動である。すなわち、「〇〇しよう」という能動的認識が、機械論では重要視されず、人間が機械のように、ただ受動的に動くものとされる。

フロイトの精神装置という捉え方にも、人間の意志活動の軽視が見られている。装置の基盤としての本能に精神が規定され、それにより行動が決まってしまうという見方である。もちろん「自我」という装置を設けて、そこである程度の意志活動は認めているものの、それもまた本能に縛られたものでしかなく、本能満足を制限しようとする意志活動でしかない。「超自我」という装置にしても、自我の本能満足を、社会的規範から規制しようとするものであり、その意味で、狭い範囲の規範（意志の一形態）でしかない。

そこまで重要視されている本能である。何故に本能が、そのように重要視されているかは、上記に述べた他に、当時の性に対する社会的認識の変化も挙げられる。すなわち、封建的な社会で縛られてきた性的認識が、1900年代の世紀末社会において緩んできたということである。それにより性的欲望の発散が以前より自由になされ、性的な乱れの風潮も社会に出てきたのである。その結果、性的な認識も、より意識されるようになったと言えるが、反面、こ

れまでの性的規範との葛藤も生じ、そこに認識上の対立が頭の中で生じやすい。欲望を満たそうとする認識と、それを禁止する認識との対立である。更には、ダーウィン進化論の影響から、人間と動物の違いが以前ほど問題視されず、動物の本能のあり方が、人間にもそのまま持ち込まれたことも影響している。

確かに人間において、動物的本能も大事であるが、動物と異なる側面も重要視されねばならない。それは像を創る脳細胞の側面である。すなわち、精神活動は本能という動物的な側面の影響を受けるが、それと相対的に独立した働きをも営むのである。分かりやすい例で言うと、動物ならば本能のままに子どもを作り育て、自らの生命を終えていくのであるが、人間は必ずしも、そうはならない。性的活動を行わない未婚男女が増えたり、結婚しても子どもを作らなかつたりする。その結果、現在の日本は、少子化社会になっている。また、生殖につながらない性活動（同性愛など）を行ったりするのも、人間の特徴である。それは本能と相対的に独立した認識が働いているからである。動物的本能よりは、それまでに育てた、自分の個人的な欲望を重視することによる。それは、赤ん坊や幼児期からの育つ過程、その後の成長の仕方、生活の仕方によるものである。それぞれの小社会の生活の中で、その人なりに認識が創られていくという、人間の特徴がそこに表れている。

もちろん、それは性的認識のみではない。人間社会での生活の仕方（認識や行動）は、それぞれの個性として創られていく。個性別的な認識としてであり、それが動物との大きな違いと言える。動物は類や種として、その存続のために本能的に生きているが、人間は動物としての本能を持ちながら、人間社会の存続と発展のために生きていき、その結果、動物とは異なり、社会や文化の発展を創り出す。つまり人間の認識は、類として生きつつ、個性性としても生きていく。その人らしさとして、社会の中でその発展に寄与していく。しかし、その個性別的認識が社会に適合しなかつたり、敵対するようになっ

たりすると、精神の病や犯罪行為などが生じることにもなる。動物のように本能的に生きない故である。

それでは、フロイトの功績は何であろうか。それもまた、上記の人間の特徴に関わる。それは経験的ながら、人間の個性別的認識の重要性を見たことと、生育過程の大事さを説いたことである。それは本能論に支えながらも、その人の幼児期の問題にさかのぼって、そこで生じた問題が、後の成人期に影響していることを、精神医学の歴史上初めて明確に示すことが出来た。その人らしさと生育過程を、フロイトなりに本能の問題として、治療において解決しようとしたのは、画期的と言わねばならない。たとえばエディプス・コンプレックスというものも、3歳児頃の両親との関係を、性的本能から捉えたものであり、児童精神の成長発達を問題にしている。

このようなフロイトの功績を、後の精神分析は、どのように捉え、どのように発展させていったか。ある学派は、フロイトの捉えた乳幼児期の精神発達の問題を重視し、更に詳しく展開していった。そこでは主に親と子との関係を問題にして、たとえば母親が与えるオッパイを介して、どんな精神発達の問題が生じるかを検討していった。また、乳幼児期の発達の問題が、後の精神の病とどのようにつながるかを検討していった。しかし、これらの展開は、フロイト理論を詳しくするものではあっても、性的本能論の延長上にあり、その限界を修正し、それを越えるものではなかつたと言える。

次に、精神装置の一部である自我の問題を、大きく取り上げたものがある。これはフロイトがエスの変化として、本能のコントロールを行う部位として、言わば消極的に捉えた自我の役割を、社会の中で生きる上で大事な働きをするものとして、自我の社会適応を、積極的に問題にしていったものである。しかしながら、その自我も、本能に根ざすという見方から離れなかつたため、フロイトの限界を越えるものとはならなかつた。

最後に、フロイトもわずかに捉えた、自我への社会・文化の影響を、大きく取り上げたものがある。

すなわち、人間は単に本能に隷属するものではなく、社会や文化の影響をも受ける存在であると捉えた。また、人間には性本能だけでなく、人間になる衝動があり、それが人間の精神発達に大きな役割を果たすと捉えた者もいた。これらは人間特有の精神発達を、性的本能論から離れて、重視しようとするものである。それはそれで意義のあるものであるが、それとフロイトの本能論とが対立したままであり、その統一がなされていない。すなわち、自らの学説の基盤が不明確であって、フロイトの「精神装置」に対応するものがなく、脳細胞のあり方からも説かれていない。

このような精神分析の歴史を経て、現在に至っている。フロイト理論の問題点は解決されないまま、フロイトの功績も、まともに受け継がれないままである。現在、精神分析は以前ほど盛んでなくなり、まともにそれを学ばずに否定するだけで、フロイトの功績が受け継がれていない。脳細胞の働きの精神面の究明よりは、脳の実体的なあり方からだけの究明が主流となっている。すなわち、精神の病を、脳の生化学的・生理学的側面からのみ捉えようとする現実がある。その結果、精神病の治療も、薬物療法や行動療法だけで行うことになり、医師の役割は薬物の選択が主となっている。患者の精神面を、まともに扱える医師が少なくなっている現実がある。

そのような現実だからこそ、フロイトの功績を再評価し、それを現実に役立てられるような試みがなされねばならない、と始められたこの連載である。この間の連載で、フロイト理論に大きく欠けていることが明らかになった。それは「生活過程」である。

単なる「生活」ではなく、「生活過程」が大事なのである。前者の「生活」については、フロイトなりに「生活」を重要視しているが、それは主に「性生活」の観点からであり、しかも幼児期の生活に限定される。その時代に「生活」を取り上げた点で、それはそれで卓見と言えるが、本当に問題にすべきは生活の過程である。過程というのは、「事物の積み重ね」という意味であるが、生活過程は一時の生活だけでなく、日々の生活の積み重ねを、連続的に

問題にする。それは、この世に生まれてからの生活過程である（子どもが親に育てられる過程は生育過程と呼ぶ）。

たとえばフロイトは、幼児期に男児が性意識に目覚めて、母親との性的（主に精神面）関係を結ぼうとするが、父親に阻止され、更に去勢の威嚇を受けて、自らの性的欲望を断念することが、成人してからの異性との関わりに、大きな影響を及ぼし、それが神経症という病につながると説いた。有名なエディプス・コンプレックスの問題である。母親との愛情を重視し、父親に敵対するというそれは、フロイトの幼児体験に基づいていると言われているが、幼児期生活の一断面（3歳頃）を取り上げたものである。

ここを生活過程から問題にするなら、そもそもその子が、どのような時代（社会）の、どのような家庭環境に生まれたかから問題にする。フロイトで言えば、20世紀後半、オーストリアのユダヤ人家庭に生まれた。母親の違う兄弟が多い中で、最後に父と結婚した女性の唯一の男児と誕生し、母親に溺愛された。そして将来を期待され、勉強が出来る環境を整えられ、兄弟の仲でも特別扱ひされたという。

ここでは、当時のヨーロッパ社会、とりわけオーストリアという国家が、いかなるあり方で、どのような社会規範（物事の見方）が通用していたか、その中でも特殊なユダヤ人社会には、どのような社会規範があり、フロイトの両親は、その中で家庭という小社会を営む上で、家庭内にどのような規範を作り上げ、家族はそれにどのように対応していたかまで問題にしなければならない。

先のフロイトの幼児体験にしても、赤子の頃から、父親や母親からどのように育てられてのことであつたのか、他の兄弟との関係はどうであつたのか、何故フロイトが父親に恐怖の体験を抱くようになったのか、更には何故その体験が後に思い起こされたのかまでを、生活の連続的な重なりから見なければならぬ。

それは家庭内での生活過程から、学校という社会

での生活過程、大学医学部に入ってから生活過程、大学を出てからの生活過程、精神科医となつてからの生活過程、精神分析医となつてからの生活過程、結婚して家庭を持ってからの生活過程、子どもを持つたり親を亡くしたりする生活過程、精神分析医として苦勞を重ねる生活過程などである。そして、それらを切り離して見るのではなく、連続的な重なりとして見て、そこでフロイトの上記の体験の意味を捉えていくことが大事なのである。

ここまでの詳しくはなくても、治療する患者に対しても、その生活過程を理解し、そこから、その人なりの病み方を理解して、それに対応していくことが必要なのである。特に、病んでいく人の認識に焦点を当てて、現在どのような認識になっているのか、そこまでに、どんな生活を、どのような認識で行ってきたのかを見ていく必要がある。

しかるに現在の精神医学では、そのような見方が全くなされていない。統合失調症にしても認知症にしても、脳細胞のメカニズムから、神経伝達物質のあり方の究明がなされ、その人の病に至る生活などは、まともに見向きもされない。そこに、フロイトの時代からの退歩が見られる。それゆえ、ここに「フロイトの復権」しかも現代的な復権＝生活過程の重視の視点が示されることになる。

ここで、フロイトとは異なる人間観を提示する。それは「人間とは、夢を持って生き、それを達成しようと努力する存在である」というものである。ここでの「夢」は、フロイトの重視する夜に見る夢とは異なり、日中見る夢であり、目的とか志とか呼ばれる認識のことである。すなわち、未だ現実に達成していないことを、達成しようと努力するものである。その夢の形成の仕方、その人の育つた過程や、生活する過程で異なる。特に、思春期という時期に描かれる夢は、その後の人生にも大きな影響を与えることになる。

このように夢を描くからこそ、人間は他の動物と異なり、社会の歴史を発展させてきた。今の現実とは異なる現実を求めて、社会的に実践することによ

つてである。それは人間の言わば「本能」のようなものであるが、本当の本能とは異なり、「持って生まれてくる」ものではない。それは家族によって、あるいは広い社会によって、その人らしく形成されるものであり、言わば社会的に創られる。そして、それを達成しようと社会で努力するのであるが、そんなにうまく達成出来るとは限らない。自分の思っていた現実とは異なって、夢の達成を阻む現実が存在する。そこにどう立ち向かうかも、その人らしさである。そこに精神の病へと至る道も存在することになる。

すなわち、夢を達成出来ない現実とは異なる「現実」を、頭に描いてそこで生きるという道である。たとえば「自分が誰かに狙われている（それゆえ社会で生きられない）」という悪夢であり、そこから目を反らせなくなってしまう。それゆえ社会で生きるためには、治療が必要とされる。フロイトが治療した患者もまた、社会的に描いた夢の達成に困難を感じている人々であり、仕事での生活や家庭生活に夢を描けなくなっている。

そこをフロイトは、「性生活」という側面から治療していった。そこでの「性」は、他人への愛情というものであり、その人が他人との関係がうまく持てなくなった現実を、その側面から捉えて、そこに関わる問題を、本人に気づかせていったのである。そこでは治療者への信頼という側面も大事であった。すなわち、治療者との良好な関係を築き、治療者からの働きかけを素直に得ることが必要である。治療に「夢」を持つことである。そこで、これまで他の人間関係で得られなかったことが、治療場面で得られていき、そこから現実の問題を解決していくことが出来るのである。

しかしながら、愛情という感情そのものだけで、現実の社会での問題が解決するわけではない。あくまで、その人の描く夢が、社会的に実現できていく方向に、頭が働いていくことが必要なのである。すなわち、現実の生活で描く夢を、社会的に実現していく方向に行くことであり、それが出来るように指

導するのが治療と言える。そこがフロイトには分かなかった。

それでも、フロイトの治療で症状の改善を見た事例もいたわけで、そのことの意味も見ておかねばならない。まずもって、自分の認識に関心を向けて貰え、それを整えようとするフロイトの姿勢に感動し、やがてはフロイトと過ごすことに夢を描くようになった事例が挙げられる。それまでの生活では得られなかったことが、フロイトの治療で得られたという経験からである。しかしながら、それで現実の生活での苦しさが、解消するわけではない。それゆえ、フロイトは更に一歩治療を進める必要があった。

次に、異性との関係で悩んでいた事例のうちで、愛情問題そのものがテーマとしてあるならば、フロイトの治療は正に当を得たものとなる。ただ、自分の過去の生活にまで立ち入られることが嫌な人間には、その治療は辛かったと思われる。そこを乗り越えての治療が必要になるからである。

けれども、これまでの連載で何度も述べたように、現実の社会生活では、愛情だけが問題になるわけではない。学校や職場での生活がうまくいかず、自分の思い描いていた夢の実現が困難な状況に置かれ、そこで精神的な病の方に向かった患者の場合、単に他人への愛情を問題にするだけで、本来の問題が解決されるわけではない。

治療の場では、フロイトの治療態度に心を開いたとしても、そこだけに留まっていたは、本来の問題の解決にはならないのである。それゆえ、そこでの治療は難渋することになる。治療を望まない患者や、フロイトの治療に乗らない患者の認識は、治療に対する抵抗や拒否につながっていき、やがて自分を傷つける方に向かう場合もある。そこでフロイトは、その現象を理解するために、「破壊本能」を設定し、自己の治療の正当性を、やはり「本能」から理解しようとした。

このように見てくると、フロイト理論に基づく精神分析が、あまり隆盛にならない現実も理解することが出来る。現代においては、性という本能は、社

会的にもはやタブーにはなっておらず、その願望を自分の中で「抑圧する」ことも、社会的には必要でなくなっている。インターネットを初めとする情報社会が、その欲望充足にも役割を果たしており、性的な本能の実現に、あまり悩むこともなくなっている。それだけフロイトの時代とは、大きな様変わりが見られている。

もちろん「愛情」の問題は、相変わらず存在するにしても、「性的な縛り」という観点は、あまり必要でなくなっている。そして、それ以外の社会的な適応の問題が、様々に表れている。「引きこもり」「児童虐待」「ストーカー」「摂食障害」等々の現代的な問題である。特に「境界性人格障害」など、人格の創られ方の問題が、今日では解決の難しい問題として多く現れている。それもまた現代社会の生んだ問題と言える。これらもまた、自分の「夢」の実現に障害を来した人々の辿る、精神病理的な道である。

それらに対して精神分析的なアプローチを行ったとしても、背景にあるフロイトの問題を克服しないと、つまり本能論から脱しないと、有効な治療にはなり得ない。けれども、フロイト理論の学びを正しく行うならば、すなわち、その人の生育過程や生活過程に重きを置いて患者を見ていくならば、問題解決に一歩近づいていける。

そのためにも、患者の認識をしっかりと見ていく必要がある。外界のあり方を、頭の中に、どう描いているかであり、描かれた像に対し、どう思って、どう行動しようとしているかである。そして、その相手の認識の展開を、しっかりと追える実力も付けていく必要がある。そこに大事なのが、相手の認識を、それまでの生育過程や生活過程から捉えていくことである。特に、幼少時の親との関わり（育てられ方）は、フロイトと同様に、重視する必要がある。もちろん本能論からの重視ではなく、そこで人間関係の基本を学んでいくゆえに重視する必要がある。人との関わり方、認識の表現の仕方の基礎が、そこで学ばれていく。異性との関わり方の基本も、異性の親との関わりが大事であり、それが後年の異性との接し

方に影響するのは当然である。

ただ、それはあくまで「基本」であって、それだけで後の関係の持ち方が決定されるわけではない。そこがフロイトと大きく異なる。すなわち、親との関わりが基本であっても、そこに兄弟や親戚、あるいは近所の人々、幼稚園や保育所での他人との関わり、更には学校生活での教師や友人との関わりが、その人の関係の持ち方や、将来実現する夢の形成に大きく関わっていくことになる。そのような過程で形成された、「その人らしい認識のあり方」なので

あり、そこに働きかけていくことが大事なのである。

このような人間の認識の捉え方は、宮崎県立看護大学で長年にわたって、学生に教えてきたことである。また、学生に教えていく中で、深められてきたものである。それゆえ、定年をあと2年後に控え、これまでの教育の歩みを、「認識の捉え方」「精神の病の捉え方」に絞って解いてみることも必要かと思われる。

Lecture

What Academic Achievement did Freud leave ?

—Restoration of Freudian Theory (8・final)—

Yuji Fuse

【Key words】 instinct, human characteristics, life history, draw dream